

代々木学生寮

戦後の学生数の増加と住宅難を背景に、本学では板橋区板橋町の共同住宅二棟を購入し、至善寮・朋信寮という一般学生寮とするなどの対策を講じるようになった。しかし、府中寮や他の運動部の寮と合わせてもその量は絶対的に不足しており、一九五三（昭和二十八）年度は入寮希望者が三三六人で決定者が八六人という状況であった。寮の建物自体の老朽化も問題であった。全学生の六、七割が地方出身者といわれる当時の本学にとって、学生寮の増設は大きな課題とされていた。

このような中で、すでに四一年に購入してあった渋谷区代々木上原町・代々木大山町の用地に、五三年十二月、木造二階建ての代々木第一寮が新築された。同寮には四畳半（定員二人）が三室、六畳（同三人）が一八室、食堂・台所などが設けられ、収容人員は六〇人であった。ここには同年十一月に閉寮となった府中寮にいた者を優先的に入寮させ、二五人を新規に募集・入寮させる

ことになった。同寮の寮費は一カ月七〇〇円で、電灯代・水道代・便所汲み取り費等を合わせて月千円余が必要であった。

同地には翌五四年十一月に第二寮、五五年十二月に第四寮、五七年二月に第三寮・第五寮と、寮の新設が進められた。この間、別に協同組合でも寮の新築を検討する動きがあったが、実現しなかった。また、五七年六月には老朽化が問題とされていた板橋の二寮が廃止された。

同年四月には、五寮合わせて九三部屋が使用可能となった。各部屋に押入・棚が設置され、第三・第五寮には個人用ロッカーが置かれていた。各寮には火災自動報知器が設置され、食堂中心に各棟との放送連絡装置や食堂におけるレコードコンサート用の配線なども整備されていた。狭くて混雑時には行列を作って待つとはいえ食堂棟もあり、寮ごとに寮監室が置かれていた（実際の寮監は教員の法本義弘のみ）。当時の寮生は一五〇人で、

次年度からは二四〇人に増えることになっていた。

寮生の生活費は最低六、〇〇〇円（寮費八〇〇円、朝夕食費二、七〇〇円、電気代等維持費二〇〇円、昼食一五、〇〇円、定期代（お茶の水―東北沢間）四四〇円、その他雑費小遣い等）が必要とのことであった。寮内での生活は、夜七時まで自由時間、七〜十時までが自習時間、十〜十一時までが静粛時間、門限は十一時と一応決められていたが、実際には有名無実になっていたようだ。自治組織としての寮生総会で代議委員・委員長が選



代々木学生寮（円型寮）

出、食事委員・清掃委員も任命され、「自由にして明朗な勉強の環境を育成すること」を目的とした代々木自治規則も制定されている。このような代々木寮の生活

にも全く不満がなかったわけではない。当面寮生が必要とする設備として、各棟間の渡り廊下・運動設備・下駄箱などが挙げられ、浴場・公衆電話の無いことが不自由だとされていた。一部屋三人では狭く、友人関係でも問題が出やすい、劣等感からノイローゼ気味になる者が多いなどの点も指摘されていた。

五八年八月には、同地に学生寮としては全国でも初めてといわれる四階建ての円型寮が完成した。従来の木造二階建ての五寮とは異なり、円筒型の鉄筋四階建てで、寮室五二、収容人員一〇四人、全室二段式ベッド付き、暖房・浴室完備の近代的な建物であった。また、その寮費は光熱費を含めて二、二〇〇円（第一〜第五寮は一、〇〇〇円）と定められた。この新寮には三、四年生が入寮することになったが、設備のデラックスさに入寮希望者が定員の約四倍強も押しかけ係員を唾然とさせたという。

代々木学生寮は、下宿代が一般に賄い（二食）付きで六、五〇〇円以上・一畳七〇〇円が相場（五六年）という中で、七四年の閉鎖まで、本学学生の生活の一助となっていたのである。